

■ ドル/円の行方は米・日株価の動向が鍵を握る!?

前回更新分の本欄において米・日株価が一旦調整する可能性について触れたが、思いの外、日経平均株価は強気の流れを継続しており、本日も年初来高値を更新する展開となっている。今月11日以降に「三空踏み上げ」のパターンが示現したことでセオリーは「売りに向かえ」となるわけだが、実際のところ17日以降の調整はごく僅かなものに留まった。

少なくとも、ここもとは米中貿易協議に関するネガティブなニュースがあまり聞かれなくなっていることから、米・日企業の業績に対する先行き不安も薄らいでいる。前回の本欄でも述べたように、減益や見通しの下方修正が少なくないことも事実だが、そこが当面の悪材料出尽くしと見做され、むしろ買いの手が回りにやすくなっているようにも感じられる。

むしろ、月末に控えた米連邦公開市場委員会（FOMC）での追加利下げ期待も米株高の一因だが、実際に米株価が上昇すると米債が売られて米債利回りが底堅く推移するようになるので、結果的にドル/円の下値も堅くなっている。もちろん、全体にリスクオンのムードが強まっているため、そのぶん円買い需要が後退しているということもあろう。

また、本日（24日）付の日本経済新聞紙面上において『円買い阻む需給要因』として挙げられていた「機関投資家による外債投資の積極化」や「足下の貿易赤字転落に伴う日本企業の円売り」などというのもドル/円、クロス円の下支え要因として見逃せない。

とはいえ、一方でドル/円にあっては依然として200日移動平均線（200日線）の“壁”が超えられないでいることも事実。現在、200日線は109.06円処に位置しており、同水準は一つの心理的節目でもあることから攻略するのも容易ではない。

もちろん、それは一つに米・日株価の行方次第というところもあり、その意味では「今後いよいよ本格化する米・日の企業決算の結果に株価がどのように反応するか」をしっかり見定めて行くことが重要ということになる。足下では、米国のS&P500種が7月につけた史上最高値まで「あと僅か」という水準にまでせり上げてきており、一段の上昇に弾みがつく格好となれば結果的にドル/円の位置するところにも変化が生じるであろう。

なお、本日は欧州中央銀行（ECB）理事会が行われる予定となっており、波乱要素は少ないと見られるものの、ドラギ総裁最後の理事会でもあることから要注目ではある。

ここきて、ユーロ/ドルがやや強めの戻り歩調を辿っており、その行方も大いに注目されるが、個人的には「そろそろ戻り一巡」となる可能性が高いと見る。



左図に見るように、目下のユーロ/ドル(週足)は31週移動平均線が強い上値抵抗として機能している。仮に同線を一旦上抜けるとしても、その上方には62週移動平均線や一目均衡表の週足「雲」下限のレジストがある。

週足の遅行線が週足ロウソクの位置するところに到達したことも、今後の上値を押さえる一つの要素となる可能性もあり、

ここからの上値追いは容易ではない。目先はドラギ総裁の会見で、よりハト派風が強まるか否かを見定めたい。

(10月24日 11:55)